

「伝統的な言語文化」を理解させるための 季語指導に関する考察

——大学生を対象として——

石 塚 修

はじめに

俳句がわが国を代表する文芸形式の一つであり、伝統的な言語文化を代表する存在であることはいまさら言うまでもあるまい。国語科の授業においても、俳句は小学校から高校まで幅広く必ず扱われる重要な学習材となっている。また、俳句は今やわが国の伝統的な言語文化を超え、「HAIKU」として広く諸外国でも受け入れられてもいる。^①

では、その俳句の学習の意義はこれまではどのように受けとめられてきたのだろうか。その代表的な例を見てみよう。たとえば、小学校での俳句指導の実践を数多く手がけた青木幹勇は、「俳句の学習（指導）価値」として以下の10点を指摘する。

- ① 俳句は短い。俳句はリズムがある。これが、読みやすさ、覚えやすさ、そして、暗誦にもつながる。
- ② 俳句は短くて、読みやすいが、句意をとらえることはかならずしも容易ではない。この抵抗も一つのメリット。
- ③ 俳句は詩である。俳句を読むこと、作ることによって詩感を養い、詩心（うたごころ）を育てることができる。
- ④ 俳句表現には、ことばの省略、文脈の屈折が多い。これを理解や表現につなぐことができる。
- ⑤ 俳句の表現には、諸種の比喩や飛躍が多く用いられている。
- ⑥ 季語の理解と使用を契機に、季節と季節の動き、季節の動きから季感へと、関心を広げることができる。
- ⑦ 句の意味を理解したり趣を感じとるために、想像をはたらかせ、連想をあしらって読むことが要求される。
- ⑧ 短詩型であること、季語その他の制約があるために、⑤を選び、省略をする。それが表現の飛躍や、屈折につながるなど、散文では学びにくいレトリックを学ぶことになる。
- ⑨ 理解や表現に即し、言語感覚を、具体的に養うことができる。
- ⑩ 俳句を作ることがきっかけになり、作文に不得意な子どもも、書けるようになる。俳句をたしなむ主婦が随筆を書くようになる例はすくなくない。^②

青木はこれらの俳句指導を、物語を読むことと俳句の創作を連動させる指導に展開し、「ごんぎつね」を読んで俳句を作る授業をおこなっていった。

もう一人、小学校での俳句指導の権威者である藤井園彦は「俳句の教材性」を例句を示しながら、次の12点にわたって示している。

- 1 音節についての理解がなされる。
あたらしい本を読むときもんしろちょう
- 2 リズム感が養われる。
かざぐるまひとつのこらずまわってる
- 3 文法の用法について考えることができる。
をりとりてはらりとおもきすすきかな
- 4 語の適切な選択の学習ができる。
大小のなかよくならんだいも畑
MLのなかよくならんだ甘藷畑
- 5 文中における語順の働きに注目する。
はめてみるガラスの指輪夏祭り
夏祭りガラスの指輪はめてみる
- 6 語彙の拡充ができる。俳句の季語は、そのものが語彙を形成している。
- 7 助詞の機能に気づかせる。
バス降りて風さわやかな法隆寺
バスを降りて風がさわやかな道を法隆寺へ行った。
- 8 意味の強調について考えさせる。
扇風機がまわっている。
扇風機悩みだんだん消えていく
- 9 比喩表現について、その効果を考えさせ使い方になれさせる。
蛍籠中は都会の夜のよう
- 10 擬声・擬態語の働きと用法の学習ができる。
もろこしの赤い毛ごわごわ新学期
- 11 言葉と言葉の響き合いに気づかせる。
卒業歌窓辺を小鳥飛び立てり
- 12 「省略」について考えさせる。
二宮金次郎の銅像青空に立つコスモスの花
金次郎の銅像校庭にコスモス咲く
金次郎像校庭の秋ざくら⁹⁾

以上、二つの典型的な俳句学習（指導）の例からその学習のあり方を概観した。いずれも学習者個人の創作活動を前提とし、最終的には学習者に創作者としての意識を持たせようとしている

ように見受けられる。もちろん、俳句の学習である以上、近代以降の俳句観により、個人の創作活動に主眼をおいて授業がなされることには何ら問題はないかもしれない。しかし、はたして俳句の学習とは、最終的に俳句愛好者や俳人予備軍の増加を目指して行われるべきなのだろうか。学習者には、創作よりもむしろ国際化されている伝統的な言語文化としての「ハイク」を歴史的に系統立てて国際社会に向けて「語れる」ことの方が重要ではなからうか。「作れる」こと、すなわち創作はあくまでもその応用段階としてあるべきだと考える。

創作重視の俳句指導の改善を考えるにあたり、その指導を文学教育に再度立ち返って考え直してみた場合、そこにはどのような学習が考えられるだろうか。たとえば湊吉正の言う、

言語文化としての文学には、伝統・伝承と創造・発見の二つの契機の共存的性格が見いだされる。⁶¹

といった文学教育の意義や、大概和彦が今日的国語教育の課題として指摘する、

① 人間が社会的な存在であることと関わっている。

国語科教育においても、「人と人との絆を結ぶことば」の教育を自覚的に進めていく必要がある。そのためには、国語科の授業においても、学習者と学習者が相互にかかわり合う学習活動を組織し、そのなかで「かかわり合いの言語技術」を学ばせていくようにしたい。

② ことばと認識との深い結びつきを忘れないようにしたいということ。

③ 文化の継承と創造の問題である。⁶²

の3点に通じることがらを主眼として、俳句の学習が計画される場合、どのような学習内容や学習活動が必要となるのだろうか。

ただだんに五・七・五の音律で日本語を並べただけでは俳句にはならないことは当然である。それでは「この芝生入るべからず警視庁」と、先の藤井氏が学習者の創作例として挙げている「かざぐるまひとつのこらずまわってる」とではどこが異なるのか。かたや標語であり、かたや俳句だと断言できる根拠はどこにあるのだろうか。その明瞭な説明が教室で学習者に提示されなかったならば、俳句の学習はそこで自ずから閉ざされてしまうであろう。俳句はすでに社会的に認められている文芸分野であるので、改めて国語科の授業内その文学性を丁寧に説明する必要はないというのでは、学習者にとってはかなり乱暴な話になってしまう。

実際に俳句という文芸形式が簡便であるため、創作しやすく俳句愛好者が他の文芸に比較して多いことも事実である。⁶³ そのため、ともすれば俳句は誰にでも容易に創作できるものであり、創作こそが俳句の学習（指導）の最終目標と思われがちなのも無理はない。しかし、俳句の学習で最優先されるべきは、世界で最も短い詩としての俳句がなにゆえに日本の言語文化として発生し、定着してきたかについての正しい理解と実感を学習者に体系的にもたらすことであると考えられる。それこそが湊氏の言う「伝統」「伝承」や大概氏の言う「文化の継承」につながる文学教育としての俳句の学習のあり方であろう。

五・七・五の韻律と季語と切れ字という形式だけを学習者に暗記させ、とりあえず創作させるだけで、わが国の伝統的な言語文化を明確に意識させるような俳句学習（指導）は実現できまい。

学習者に俳句のどの要素に注目させることで、俳句への興味・関心が高まり、改めてわが国の伝統的な言語文化への理解を深めていけるのか、そうした配慮を加えた学習こそがより充実した俳句の学習を保証するはずである。

ここでは、大学生を対象にして、俳句の「季語」に注目させ、それへの実感を抱かせるような授業を試行し、そうした季語への実感が、わが国の伝統的な言語文化への興味・関心を持つ契機にどのようにつながるかを考察した。

1 季語の「実感」を持たせることの重要性

ある大学の国文学科の2年次の学生44名にたいして「俳句指導で必要と思われることがら」という質問をしたところ、以下のような回答を得た。

第1位は「季語」で32名(72.7%)、次いで五・七・五の音数が26名(59.1%)、以下、作者の心情など句の背景が21名(47.7%)、切れ字が6名(13.6%)、字余り3名(6.8%)となった。このことは俳句では「季語」の知識が不可欠であることが、一般的な理解となっていることを示している。同じ集団に「春の季節を表す言葉を三つ挙げなさい」という質問をしたところ、

桜 34名

梅・うぐいす・たんぽぽ 7名

つくし 6名

桃 4名

なずな・菜の花・入学 3名

雛・卒業・立春・ふきのとう・蛙・春風・*あけぼの 2名

風光る・節分・朧月・白魚・はこべ・せり・雲雀・花見・春一番・新芽・霞・早春

蛤・山笑う・*田植え・*山吹 1名 (*は季節外や季語でないもの)

という結果となった。この結果は、俳句での「季語」の重要性は知っていても、実際に季語を自分の語彙としては獲得できていないことを示しているといえよう。

また、次のデータは、同じ大学の国文学科の昨年度の2年次の学生40名にたいして、「あなたの知っている俳句を1つ挙げその作者名も書きなさい」という課題への回答である。この回答者は全員が将来中等教育の国語科教員を目指している。ところが、その回答を見るといかに突然の質問とはいえ、かなり乏しい結果になっている。

これらの回答者は、少なくとも小学校から高校までの間に数回は俳句の授業を受けてきており、しかも、国文科に進学しているのだから、ある程度国語に対する興味・関心も高い学生たちのはずである。その学生にしてこうした実態なのである。こうした俳句の個別の作品に関する知識が定着していないのは、たんに学習者の学力・能力による問題だと結論づけてしまっはなるまい。むしろ、このデータは小学校以来再三にわたって学習してきたはずの俳句の学習が、学習者にあまり定着しないままで大学生になってしまっている実態を示しているのである。おそらくは多く

古池やかはづ飛び込む水の音	15名 (芭蕉10名 一茶4名 不明1名)
五月雨を集めて早し最上川	6名 (芭蕉6名)
閑かさや岩にしみいる蟬の声	6名 (芭蕉6名)
夏草や岩にしみいる	1名 (芭蕉1名)
夏草や兵者どもが夢の跡	2名 (芭蕉1名・不明1名)
柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺	2名 (子規1名・不明1名)
春の海ひねもすのたりのたりかな	1名 (蕪村1名)
かさねとは八重撫子の名なるべし	1名 (芭蕉1名)
やせ蛙負けるな一茶ここにあり	1名 (一茶1名)
回答不能	5名
鳴かぬなら鳴くまでまとうほととぎす	1名
松島やああ松島や松島や	2名

の社会人の俳句に関する知識もこの程度であろうと推測できる。

こうした結果にたいしては、名句の暗記を徹底しないために起きるのであり、小学校などでさらに暗記・暗唱を徹底すれば解決するという考え方を持ち出すのはあまりに短絡的であろう。たしかに名句を数多く暗記していれば、他の句を解釈するときにも深みのある解釈につながる可能性は否定できない。しかし、おそらくこの学生たちも小学校や中学校では大いに暗唱をしたはずである。それが数年を経て全くと言っていいほど記憶から消えてしまっているのはなぜなのだろう。おそらくは覚えた俳句が学習者の現実と密接に関連していなかったために忘れられてしまったと考えられる。生涯学習の観点からも、俳句の知識の学習者への定着は大切な問題である。

季語は、和歌では「季の題」、俳諧では「四季之詞」とされ、重視はされていたものの、近代俳句における扱いのように厳正ではなかった。「季語」という呼称は明治41年に大須賀乙字が初めて使ったものであるという。⁷⁾

連句での発句に挨拶性が求められたために、客は当然季節と連句の場について神経を払うようになった結果、季節を表す語が重視されるようになったとされる。また、季語はわずか17音の俳句にあっては句の享受者にたいして強いイメージをもたらし、句に詠まれた情景の理解を助けるはたらきもする。そこで、季語の知識は俳句愛好家にとって必須とされるのである。季重なるの句が難しいとされたり、忌避されるのは、17音のなかに2つ以上の季語を盛り込むと季語によるイメージが錯綜して享受者に混乱をもたらすためである。反面、そうした季語によるイメージの限定が俳句の文学性を損なうと考える立場も生まれ、無季自由律運動が展開したわけである。

季語の伝統には当然和歌の季題の伝統が前提となっている。季語を理解していくことは、俳句のみならず和歌の伝統をも理解する道筋につながる。つまり、日本の古典の韻文を理解するには季語にたいする理解は不可欠であり、かりにその知識が欠如したまま俳句や短歌を創作したとしても、たまたま専門家に認められる作品が出てくることがあるかもしれないが、それは個性の間

題であり、教育の成果として期待できるものは少ない。

宮坂氏は季語を和歌の伝統よりさらにさかのぼって見直すべきだと提唱し、「季語が生み出された、あるいは生み出される感動の原点に立ち返り、実体に触れることが必要なのではないか⁽⁸⁾」と述べる。俳句のたんなる決め事としてのみ季語を捉えることは、季語の持つ本質を矮小化してしまうことにつながると言うのである。季語の理解は、文字通り「語」の理解であるから語彙指導の一環にすぎないとする狭隘な先入観を脱した季語に関する学習（指導）なくして、充実した俳句の学習はもたらされないと考える。

2 生活実感につながる「季語」学習の実際

先に宮坂氏が述べたように季語の実感を学習者に定着させるには、授業にどのような工夫が求められるのだろうか。かりに歳時記を開かせて知らない季語を語彙として調べさせても、学習者たちにその実感は生まれまい。大切なのは学習者の「発見」に裏付けられた「季語」を獲得させることである。

そこで、先の調査対象となった学生たちにたいして（図1）のようなワークシートを与え、

- ① 自分がひかれた自然の光景の画像を撮る
- ② その画像から「季語」を見つけ出して調べる
- ③ その季語を用いた例句を調べる
- ④ その光景にひかれた理由を書く
- ⑤ その画像を元にして俳句か短歌を創作する

という、①～⑤の学習活動を促した。

	画像を元 に俳句や短歌 を作ろう	例 句 季 語		画 像
				この元 気にひか れた理由

私の見つけた「四季」
（ ）年（ ）
（ ）番 名前（ ）

（図1）

大学の国文学科の学生が対象でもあったため、ゴールデンウィーク中の各自の自主的な学習としましたが、対象が児童・生徒の場合には、さらに細かく学習活動を分けて実施する必要があると考える。

①のような身の回りの季節感を感じた光景を画像を撮ることは以前は機材の関係でなかなか困難を伴う学習活動であった。しかし近年は携帯電話のカメラ機能が相当充実しているうえに、プリンターも性能が高くなっているため、特別な機器の用意などは必要なく、学習者にとっては抵抗感なくできる比較的簡便な活動なのである。②については、学習者が出会った季語に関して、安易に「春」「夏」などとただ季節名だけを答えて終わりにしないよう、歳時記や辞書での調べ学習も必要となるように留意した。③で例句を探させる学習を用意したのもそのためである。④については、根拠を示して「書くこと」が求められる課題となっている。⑤については、今回のワークシートには、実際に大学生がどの程度の創作が可能か調べるために付したが、この課題の目的からすると児童・生徒の場合に実施する場合は不要であると考えられる。

次に学生の回答の一部を示しつつ、「季語」に実感を持つことについて検証する。

たんぽぽ

アパートの駐輪場でタンポポの綿毛を見つけてきました。いつもは何気なく通っていて気にもとめない場所にも春が訪れているのを感じるとともに、飛んでいく綿毛を見て、今の自分の心境と重なるものを感じました。(I・K)

春の風・春惜しむ

…地味な一枚ですが春の風に吹かれて生命が運ばれているんだと感じ、この様に目立つ訳でもない一枚をとりました。(K・S)

例句 春をしむ人や榎にかくれけり 蕪村

片町やさらされ来るや春の風 蕪村

自作句 春の風一粒生命 (いのち) 運んでく

春をしむまた次の春へ旅にでる

青葉

…ふと窓から外を眺めみると、外の桜の木がいつの間にか緑になっていることに気がつきました。(S・Y)

躑躅

普段何気なく通っている土手にたくさんの躑躅が咲いていることに気づきました。(K・Y)

自作句 土手に咲く色とりどりの躑躅の花

菜の花

桜が咲き、少し散りかけていた頃に、学校へ行く途中、菜の花がとても鮮やかな色をしていることに気づきました。

自作句 道のそば菜の花の黄よ肩くんで

これらの「たんぽぽ」「春の風」「青葉」「躑躅」「菜の花」に共通している点は、学習者たちが「季語」に目を向けることで、日常生活における語彙を見つめ直している点である。つまり「季語」の探索が湊氏の言う「発見」を学習者にもたらしめているわけである。とくに、カメラとの関係がそうした「発見」への注意力を喚起していることは、「春の風」の「目立つ訳でもない一枚」というようなコメントからもうかがえる。こうした「発見」は、文学における「異化作用」にも通じ⁹⁹、学習者にたいして文学の行為そのものへの実感をもたらしすることにもつながっていると考える。学習者たちはこの「発見」の繰り返しにより、自身の生活環境を丁寧に見つめる視座を育むことにもなる。俳諧の季語には、そうした教育的な機能があることは、早く江戸時代にも指摘されていた。¹⁰⁰

鯉のぼり

雪が残る富士山がまるで瀑布のように見え、… (O・T)

自作句 鯉のぼり登る滝は富士の御山

蒨

一面に蒨が群生している様子が緑の海のようにも思えたのでこの句ができました。 (O・M)

自作句 帰省して迎えてくれた蒨の海

藤

藤の花のまわりを蜜蜂が舞っていました。その光景が、蜜蜂が藤の花の満開を祝ってお花見をしているように見えました。 (I・H)

自作句 咲き誇る藤波見んとみつばち踊る

「鯉のぼり」「蒨」「藤」のコメントに共通して見られるのは「比喩」表現である。学習者は俳句の創作以前に季語についてコメントすることで、すでに創作活動の第一歩を実践する。そしてその比喩が俳句の創作活動にも活かされていることは、「鯉のぼり」では「滝」に、「蒨」では「蒨の海」に、「藤」では「藤波見んと」と句に詠み込まれていることからうかがえよう。その季節の光景をとらえさせ、そこからさらに季語を抽出させてコメントを書かせる学習によって、学習者はより効果的に光景を書くことで伝えるために、文学の表現技法を自然と用いるようになり、そ

れを創作活動にも効果的に活かそうとするようである。このことは、俳句の創作を学習者にいきなり要求するよりも、季語について調べたり、理解を深めることが、創作活動においても効果的であることを示していると考ええる。

桜

…まだこちらの山里では桜が咲いていて、春を二度味わえた気分になりました。

(O・C)

自作句 五月晴れ桜はほほえむ里の春

桜

…昼間の暖かく人でにぎわっている光景とはまた違う、朝方の肌寒く、誰もいない風景の中、花を満開にしている桜に思わずシャッターを向けていました。

(S・M)

自作歌 静かさに色を添えたる朝桜 かがやく水面のキャンパス胸に

晩春

周りの桜が散ってしまってもこの桜は寂しくないのだろうか。でも自分のそんな思いと裏腹桜の花は凛と力強く咲いているところに自分は心打たれました。

(O・Y)

自作句 晩春に凛と咲きける桜花

花

部活の練習、ミスをしてボールが木の茂みのなかに入ってしまった。奥まで潜って探していたところ、木の陰に白く小さな花がひっそりと咲いているのを発見した。ミスに落ち込んでいた私の目には条件の悪いところでも賢明に生き、小さくともきれいな花を咲かせたこの植物がとても健気に映り、なんだか励まされたように感じた。(I・S)

自作句 暗がりに名もなき花の咲きゐたる

ここに示したのは、すべて日本を代表する「季語」の一つである「桜」についてコメントされたものである。もしも「桜」という題で創作活動を課していたら、学習者たちにここまでの幅のある桜のイメージが浮かんだであろうか。傍線部のようなコメントは、各自が主体的に桜を見つめ直したからこそ、出てくるものであろう。この他にも「桜 小さな花びらの一つ一つに生命力を感じられます。(K・A)」というコメントもあるなど、桜という存在自体を丁寧に見つめ直している実態がうかがえる。しかも、山里の桜に二度目の春を感じたり、人気のないなか咲く桜に注目するなど、俳句の創作以上に学習者の「発見」が促されていることがわかる。

「俳句ライブ」の活動を通して俳句指導を实践する夏井いつきは、俳句ライブでの創作で提唱する「取り合わせ」による作句についての批判に対して、

この方法（「取り合わせ」）は言葉を弄ぶんじゃないかと。俳句というのは、何かに感動にぶち当たって、その感動をきちんと語らせなければならないのではないかと。学校現場での指導は、その頑固な思い込みとの闘いなんです。

NHK 教育テレビ「天才テレビ君ワイド・俳句大賞」の兼題の一つが「たんぼぼ」たったののだが、驚いたことに「たんぼぼは綿毛になって旅をする」という一言一句変わらない投句が二百通(毎回三千通に及ぶ)以上も届いた。子供たちの感性に、牡蛎殻のようにこびりついてゆく固定観念にぞっとし、これが俳句ではないんだよと伝えて歩きたいと、そんな強い衝動にもかられた。⁽¹¹⁾

と述べる。まさに「牡蛎殻のようにこびりついてゆく固定観念」を払拭して、学習者なりの視座を獲得させるためにも、「季語」を丁寧に学習させることは重要なのである。

おわりに

このように「季語」をまずは学習者に伝統的な言語文化として理解を促し、再度、見つめ直させたい。創作活動につなげることが、俳句の学習（指導）をより充実させることにつながる。ただ「豊かな季節感」というキャッチフレーズを教師がいくら声高に訴え、俳句は四季のある日本ならではの言語文化であると解説しても、学習者はあまり共鳴しないだろう。それは、季節に特定の感情を抱くのは日本文化独自の感性ではなく、四季の変化も温帯地方に属する外国にもあることは何ら不思議ではないことを学習者は直感しているからである。大切なことは、私たちの祖先はある季節を語句によりどう受けとめ、伝統的な言語文化として扱ってきたか、また現代に生きる私たちは、それらの語句をたんなる知識として死蔵するのではなく、実感を持ちつつ自己の語彙として獲得したうえで、どのように自己の言語生活で再生していくかを考えさせることである。山下直は、

学習者に古典の世界を身近に感じさせるためには、古典の語彙を単に知識として習得させるのではなく、学習者自身の中に既に備わっている語彙と古典の語彙とのつながりを視野に納めて、指導を行うことが必要ということになるだろう。

と述べ、『古今和歌集』を用いつつ、そうした語彙指導の重要性を検証している。⁽¹²⁾この指摘にある「古典」を「季語」に置き換えて考えれば、今回の検証とまさに重なる。創作活動は学習者に自身の語彙から新たな表現をつむぎ出そうとする視座がなくては、せっかく創作させても、夏井氏の指摘のように「固定観念」に縛り付けられた「月並み」な作品で終わってしまう。児童・生徒たちが国語教育を通して、そうした無味乾燥な創作活動を再三繰り返すことは、むしろ俳句を忌避する人材を育成することにもつながりかねまい。

「季語」の学習は語彙・知識獲得だけの矮小な学習にとどめず、学習者が実感を持って自身の周

辺の環境に目を向けるようにすべきである。学習者に季語という「ことば」そのものを発見する契機を与えることで、彼らが伝統的な言語文化と積極的に向かいあえるようになるからである。今回はその出発点における試行を示したが、今後はこれを足がかりとして、系統性のある俳句指導の開発を検討していきたいと考える。

注

- (1) 佐藤和夫『海を越えた俳句』丸善ライブラリー 丸善 1991
- (2) 青木幹勇『俳句を読む、俳句を作る』太郎次郎社 1992 pp.22-23
- (3) 藤井圀彦『俳句の授業・作句の技法』明治図書 1998 pp.22-29
- (4) 湊吉正「文学を学ぶことの意義をめぐって」全国大学国語教育学会『新訂中学校・高等学校国語科教育研究』学芸図書出版 2002 p.7
- (5) 大槻和彦「国語科教育とことば・文学の学び」pp.11-12
- (6) 第21回伊藤園「お〜いお茶俳句大賞」(2010)の応募総数は165万7098句を数えた という (<http://www.itoen.co.jp/new-haiku/21/index.html>・2011/7/20閲覧)
- (7) 宮坂静生『季語の誕生』岩波新書 2009 p.5
- (8) 同書 p.176
- (9) 大江健三郎『小説の方法』岩波書店(1978)・ミシェル・オクチュリエ／桑野隆ほか訳『ロシア・フォルマリズム』白水社(1996)
- (10) 『俳諧寢蓐』(文化9・1812)には、「少年の入ひまある時は、俳諧をなすべし。俳諧をなせば、多くの鳥獸草木の名を覚ふ、且、年中の行事、古歌、古事の意をも伝へ知る也。」とその教育的な効果を述べているという。(矢羽勝幸『信濃の一茶』中公新書 1994 p.37)
- (11) 夏井いつき『子供たちはいかにして俳句と出会ったか』創風社 2000 p.142
- (12) 山下直「国語総合における古典の学習指導の観点」『月刊国語教育研究』No4 6 8 日本国語教育学会 2011 pp.22-27